

男女がお互いを尊重し、その人らしく生きる。
仕事も暮らしも楽しむ。
そんなあなたを応援する情報誌です。

特集 仕事と暮らし 男性も生きやすい社会に向けて



P2

座談会
男女の枠にとらわれず
実践しよう！

P6

当世男性事情

P8

講座レポート
祖父母塾・入門編

P9

世界の仕事・家庭・生き方
「ファイリピン編」

P10

データ・ウォッチング
「47・6%」
有給休暇の取得率

P11

ワーク・ライフ・バランス
推進企業認定制度のご案内

特集

仕事と暮らし

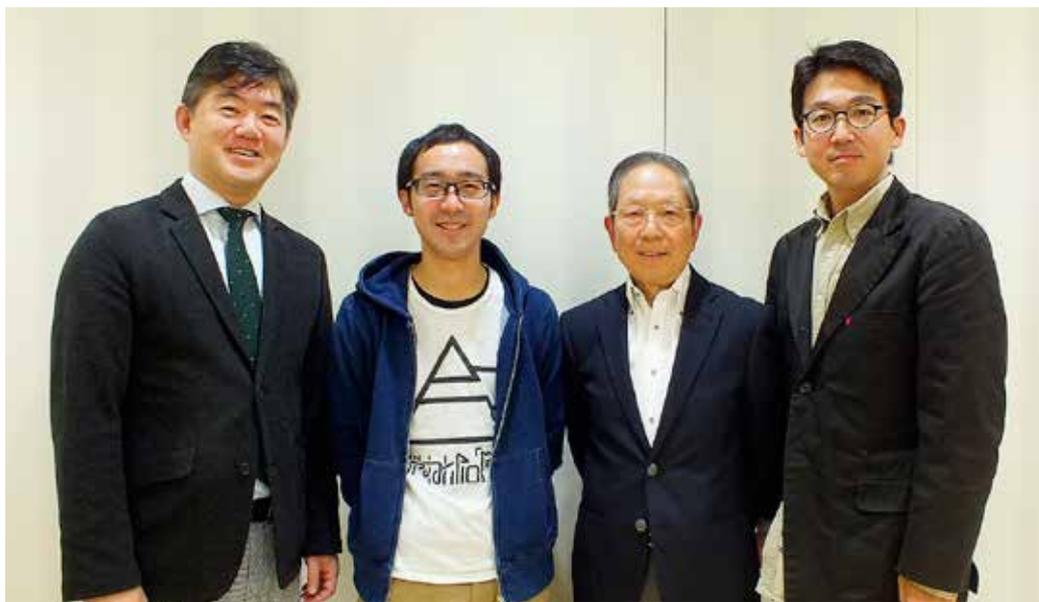
男性も生きやすい社会に向けて

座談会

実践しよう！
男女の枠にとらわれず

「男女共同参画」は、男性にとっても生きがいのある社会を目指す上で重要な課題です。職場、家庭、地域で男女が共に支え合い、それぞれが自分らしい生き方のできる社会に向けて、今号の特集では男性の視点からその課題について探ります。

はじめに、区内在住・在勤の男性4人にお集まりいただき、日頃感じている仕事や暮らしについて語っていただきました。



出席者（左から） 渡邊さん、赤木さん、松岡さん、後藤さん

やってこそわかる
家庭の共同参画

——はじめに自己紹介をお願いします。

赤木 現在独身で、新宿の会社で雑誌の編集をしているご縁で参加しました。

後藤 建設コンサルタントの仕事をしています。高2、中3、中1の息子がいます。PTA活動にも参加しています。

松岡 子どもの頃から富久町に住んでいます。今年77歳になりますが、いわゆる仕事第一の「企業戦士」でした。「男は仕事、女は家庭」が当たり前の時代でしたので、正直、男女共同参画に対して違和感がありました。でも、『ウイズ新宿』などでさまざまな情報を見聞きするようになって変わり、自分は男女共同参画を実践してこなかったなと反省しているところでした。

渡邊 妻と大学1年の娘、義母の4人家族です。妻もフルタイムで働いているので、家のことは、ほぼ義母がやってきてくれました。新宿は家賃も高く、住むのにコストのかかる所ですが、意外と二世帯で住んでシェアしていくと、暮らしやすい点がいろいろあります。

——さまざまな年代の方にお集まりいただいています、それぞれの家庭での男女共同参画についてお聞かせください。

赤木 独身なので自分のことは自分でしています、結婚しても相手に任せきれは良くないと思っています。

渡邊 私もそう思っていたのですが、ついこの間まで、ほぼ仕事だけの生活を当たり前前に続けていました。大阪に単身赴



任したとき、身の回りのことをすべて自分でやってみたらとても大変で、それまでいかに妻と義母に任せっぱなしだったことに気付かされました。今はゴミを分別して出したり、洗濯物を畳んだりなどできることから始めていますが、まだまだ分担できることはあると思います。

後藤 私も長男と二人きりで年末年始を過ごしてみても、妻がやっていたことがいかに大変だったか思い知りました。朝5時ぐらいに起きて野球の練習用の弁当を作り、帰ってきてまた晩飯を作らなければならず、仕事をするよりも疲れましたね。妻は何も言わずに毎日やってくれていたの、聞いたわけではないですが、勝手に苦じゃないと思っていました。

松岡 実は結婚して50年たったときに、妻に「離婚しようと思ったことがある」と言われたのです。仕事に行ってしまえば家庭のことは任せきりでしたので、ずっと我慢していたんだと思います。もちろん、子どもが小さいときは手伝いしましたが、今考えれば、ただ、やっていただけで、本当に助けていたのかどうか。今は反省してお返しなくてはと料理学校に通い、自分で作ったりしています。

前向きになれない 男の結婚事情

——女性に比べて男性の生涯未婚率が高くなっていきますが、赤木さんは結婚についてどのように感じていますか。

赤木 結婚はまだ考えてないですが、都会と地方では差があるように思います。故郷の岡山の友人は既にみんな結婚していますが、新宿のような都会にいと周りに独身も多いので、焦る必要はないのかなと感じています。

松岡 私の息子の一人も40歳過ぎで独身を謳歌しています。本人の生き方です。で親がとやかく言うことではないですが、我々の年代は、結婚して一人前というのがありますからやはり気になります。

赤木 仕事も充実していて現状には不満はないですね。もちろんパートナーがいってくれたらと思う気持ちもありますが、世帯を持つと不安があります。相手の稼ぎがあるならいいのですが、恋愛や結婚に前向きにならないのは経済的不安もあるかもしれません。

松岡 お金も大事だけど、ハートもね。そしたら前向きになれると思うね。

赤木 皆さん20代のころに結婚されていきますよね。結婚した後やお子さんが生まれた後では責任感など何か変わってくるものですか。

松岡 生まれてきた子どもの顔を見たときに、ちゃんと育てていかなければという使命感が湧いてきましたね。生きがいにもつながって仕事もがんばれる、そういう感情を持ったほうがいいと思う。

赤木 仕事も違うように見えてくるのでしょうか。具体的にそういう経験はありますか。

渡邊 人と接するとき、相手の状況や気持ち想像できるようになりました。結婚するまでは自分だけの世界なので、それ以外のことが分からないというか、分かるうともしなかった。結婚してからは共感する幅が広がったと思います。

後藤 自分以外の人のことはよく分からないものだというのが、分かりました。結婚生活にはいろいろなことがあるけれど、違いを理解したり、相手を尊重したりなど得られるものは大きいと思います。

赤木 ありがとうございます。参考にになりました。

仕事だけが 人生ではない！

——男性もいきいき暮らすためには長時間労働の解消が大切です。ワーク・ライフ・バランスについてはいかがですか。

後藤 私の職場ではノー残業デーが定着しています。でもみんな6時に帰って何

をするかという、職場の人と飲みにくんです。そのほうが楽なのかもしれないが、「ほかにもっとやりたいことないの？」と思いますね。

松岡 我々のころは会社が第一。定時に帰るなんてあり得ない、残業が当たり前でしたからね。

渡邊 私の職場も残業をしない方向にあります。一方、効率を求められて中間管理職にしろ寄せが行くという図式にもなっています。

松岡 私は会社に縛られ働いてきて、退職してその束縛からようやく開放されて自由を得たと思ったのです。しかし、3、4日で直ぐに何をしたいのか分からなくなりました。いかに会社人間だったかです。今は社会福祉協議会などで地域のボランティアに参加したり、生きがいを求めているいろいろなことに挑戦しているところです。

渡邊 松岡さんが定年退職されて初めて気付いたと言われましたが、仕事だけでは人生の充実は得られないとあらためて思いました。

後藤 私は子どもと過ごす時間が好きです。大事にしたいので、なるべく仕事はさっと切り上げます。もっと自分の時間も大切に人たちが増えると、働き方も変わってくると思います。

渡邊 そうですね。人材難の中で女性にはもっと活躍して欲しいと思います。それには家庭での男性の役割を増やさなきゃならない。社会の流れが変わってきていると思います。

赤木 女性だけでなく男性社員も家庭生

向こう三軒両隣の精神
若い世代も取り入れたいです



赤木一之さん
区内在勤 33歳
会社員

活が充実できるような職場環境が必要だ
と思います。

渡邊 周りに男性が育休取得した事例は
まだ少ないですが、これからはそういう
男性社員と働く機会が出てくると思いま
す。

後藤 もはや仕事も家庭も男女のくくり
で分けられる話ではないと思います。

渡邊 育ったバックボーンが全然違う、
例えば文化や習慣の違う外国の方が一緒
に働くようなことになれば変わらざるを
得なくなるのではないのでしょうか。

向こう三軒両隣
広げたい地域活動

——充実した人生には地域との関わりも
欠かせません。地域とのつながりはいか
がですか。

後藤 長年、おやじの会に参加していま
す。親子で参加できるイベントなど子ど
ものための活動をする会なのですが、飲
み会も開いて子育ての悩みを相談しあっ
たり、趣味の話などで盛り上がったたりで
非常に楽しい雰囲気です。

松岡 いいですね。女性と違って男性は
仕事上の人間関係が主で、地域とのつな
がりもなかなか持てないですよ。

後藤 そうなんです。みなさん、仕事以
外の付き合いを求めて参加してくるん
です。

渡邊 私は地域の付き合いはマンション
の管理組合くらいですね。町内会はまだ
参加できていません。

松岡 私は若いときから自分が成長する
場として地域のコミュニティが大事だと
いう思いがありました。社会に出てすぐ

富久町青少年会を作ったり、いろいろな
活動をしてきたのですが、隣のおばちゃ
ん、おじちゃんに助けってもらったこと
とが原点にあるからだと思います。私が
具合悪くて子どもの保育園に行けないと
きに、「あなたのおばあさんに私の子ど
もたちが助けてもらったから」って隣の
おばちゃんが送り迎えしてくれたもので
す。

赤木 向こう三軒両隣の精神ですね。ほ
くは一步引いて見てしまうことがあり、
グループに属するのが苦手なときもあり
ます。

松岡 今は閉塞社会なのかな。自分だけ
の世界に閉じこもっちゃう。若い人がも
つたいたいと思います。

赤木 ネットも影響しているのかも。ネ
ットの情報が日本全体の意見のように扱
われ、他人との付き合いに慎重になっ
ている人もいます。

渡邊 一步踏み出してみることも大事で
すね。

後藤 私の場合、子どもが小学1年生に

なるときに学校からおやじの会の案内が
きたんです。地域に知り合いがいなかっ
たので地元の人と知り合えるいい機会だ
と参加したのがきっかけです。結構、仕
事が忙しいお父さんも来ていますし、私
もなんですが、子どもが卒業しても参加
している人が多いですね。

松岡 ほっとするんですよ。会社の人た
ちとは全然違う世界が広がるので、こち
らの付き合いが楽しみっていう人もい
るでしょうね。私も囲碁クラブやスポー
ツジムの仲間と飲み会やっていますよ。会
社員時代の肩書きがついてくる付き合い
とは違っていいものです。

渡邊 例えばきつかけとして、地域を守
る、家族を守るための防災だと男性が集
まりやすいのではないのでしょうか。それ
もあまり大掛かりでなく気軽に参加でき
るところから始めてみる。住んでいるマ
ンションでも年1回は防災の総合訓練を
やりますが、毎回消火活動だけではなく、

家庭でも地域でも
男女共同参画を実践してます



松岡修男さん
区内在住 76歳
元会社員

- 仕事**
 - ◆仕事が減り生活が苦しい (30歳・未婚)
 - ◆休日が少ない (50歳・既婚)
 - ◆長時間労働の担当に配属されやすい (29歳・未婚)
- 結婚**
 - ◆親からのプレッシャーを感じる (29歳・未婚)
 - ◆家計を一人で支えるとなると不安 (19歳・未婚)
 - ◆親の介護もあり、収入も不安定で考えられない (38歳・未婚)
 - ◆結婚したくても現実には金銭的に無理 (32歳・未婚)
 - ◆結婚は負担と感じる (29歳・未婚)
- 子育て**
 - ◆日々の仕事が忙しく関われない (53歳・既婚)
 - ◆育児への理解が少ない (29歳・既婚)
 - ◆子育ても家事も時間がなくてあまり関われない (30歳・既婚)
- 暮らし**
 - ◆お金と時間が足りない (37歳・未婚)

男女共同参画
の視点から
「まちの声」

男性の不安や悩みについて
編集委員が、区内在住在勤の
方々の声を集めてみました

地震や水害対策などをやってみると興味を持ってもらえて参加者も増えると思います。

松岡 やはり発起人がいたり、世話役がいると長く続くから、そこを行政が後押ししてくれるといいですね。

職住近接

子育てするなら新宿

——最後に皆さんの仕事と暮らし、それぞれの思いや目標をお聞かせください。

赤木 先輩たちとお話をさせてもらって、人生設計を考える良いきっかけになりました。今まで独身生活にある程度満足していたので、結婚や人生の目標を言葉にすることがありませんでした。これからもっと多くの人と関わっていきたいです。

後藤 今日の話で、若いときには便利な新宿に住んではいけないと思いました(笑)。実は私が結婚しようと思ったのは地方勤務のときで、結婚後に新宿で暮らし始めたのです。新宿は子育てしやすいし、暮らすには便利なところですよ。

渡邊 共働きの我が家は、まさに職住近

**仕事と子育ての両立に
新宿は暮らしやすいまちですね**



渡邊功二さん
区内在住 52歳
会社員

接を考えて新宿に住もうと思ったわけです。会社の若い人にも「結婚して新宿に越して来い」と言いたいぐらいです。

後藤 職住近接は重要ですね。私も比較的職場が近いのでPTA活動にも参加する時間が持てるのですが、そうでないとなかなか引き受けられないですね。

——新宿区は待機児童数も少なく、中学3年まで医療費無料など子育て世代に手厚い施策を取っています。

赤木 仕事柄、新宿の情報を扱ったりするので、今日は新宿の新たな面を知ることができて勉強になりました。

松岡 子どものころから暮らしてきて分かるのですが、下町のような義理人情がまだまだ残っていて暮らしやすいまちだと思います。定年後はどんな地域に出ていくことをおすすめしたいですね。この間、区の「若者のつどい」に初めて参加しましたが、若い人がたくさん来ていて驚きました。ただ、その発信が末端までいっていないのが、ちょっと残念です。もっとアピールしてもいいと思います。

後藤 これまであまり男女共同参画について考える機会はなかったのですが、大変なのは女だから男だからではないと思います。お互い足りない点を補うことが大事ではないでしょうか。

渡邊 そうですね。仕事も暮らしもいろいろ乗り越えていかなければならないのは、男性も女性も一緒だと思います。

赤木 自分の周りでは見ないけれど、弱音を吐けないという男性もいるように思います。

後藤 そんなときは、おやじの会のよう

な飲み会に参加したらどうでしょう。

渡邊 男女共同参画で言えば、家庭でも自分の役割をもっと持たなければと思います。子どもたちもそういう姿を見て育ちますし、家庭生活も協力し合うほうが充実すると思うので積極的に関わっていききたいです。

後藤 昨年の12月におやじの会が主催して学校のグラウンドで紙ひこうきを飛ばすイベントを行いました。多くの方が参加してくれて、親子で楽しい時間を過ごしました。これからもおやじたちの輪を広げていきたいです。

松岡 今後の目標は、年寄りの知恵や経験など、自分が養ってきたものを發揮して子どもたちを援助する。おせっかいをしてみたいです。小さくてもそんなコミュニティがあるといいですね。もっと高齢者を活用する場をつくってほしいと思います。

——お話が弾んでとてもいい座談会になりました。皆さま、貴重なお時間をありがとうございました。

**地域にも男の居場所が必要
おやじの会に参加しませんか**



後藤英生さん
区内在住 47歳
会社員

◆自分の時間がつけれない (66歳・既婚)

◆将来、孤独死が不安 (47歳・未婚)

◆地域との関わりがなく、近所を歩くと浮いているような気がする (38歳・未婚)

◆仕事のつきあいはあるが近所の付き合いはない (74歳・既婚)

◆仕事の関係で祭り以外は参加できない (66歳・既婚)

◆長時間労働で体調を崩すことが増えた (41歳・既婚)

◆両親とも介護が必要になり、仕事に支障が (38歳・未婚)

◆孤独死が不安 (47歳・未婚)

◆地域との関わりが少なく、災害の連携が不安 (29歳・既婚)

その他

◆固定概念があると生きづらい (29歳・未婚)

◆妻にも働いてほしいがプライドが邪魔して言えない (30歳・既婚)

◆育児は取れるが家計的には苦しい (54歳・既婚)

◆短時間勤務は給与面でデメリットが大きくなる (54歳・既婚)

◆行事がないと地域との関わりはあいさつ程度で終わる (24歳・未婚)

◆忙しく趣味の時間がとれない (28歳・未婚)

◆育児が取りづらい (29歳・未婚)

◆町会・PTAは女性が多くて入りにくい (54歳・既婚)

◆家には寝に帰るだけで余暇の時間が少ない (19歳・未婚)

◆高収入・高学歴であることが求められる (29歳・未婚)

◆言い訳すると男らしくないと言われる (29歳・未婚)

当世男性事情

あなたはどれだけ
知っていますか？

男女共同参画に関する新しい言葉が生まれていきます。
男女がいきいき暮らせる社会に向けて、4つのキーワードから一人ひとりを取り組む課題についてまとめてみました。

イクボス

積極的に子育てに参加するイクメンに対し、育児と同時に仕事にも意欲的に取り組めるよう、職場環境の改善や意識改革を実行する上司をイクボスといいます。イクメンは、育児や家事をすることで、仕事に費やす時間が減り、業務に支障が出るのではないかと不安を抱えています。イクボスには、会議時間の短縮や休暇の取得促進など、部下が育児をしながら自分が望む仕事ができるようマネジメントをする能力が必要です。また、部下の仕事と家庭生活の両立を応援しつつ、自らもワーク・ライフ・バランスの取れた充実した人生を送ることで理想の上司としてお手本

になることも求められます。イクボスが増えることで、互いの人生を理解し尊重し合える職場環境が、今後ますます広がっていくでしょう。



パワハラ

パワハラは、同じ職場で働く者に対して、職務上の地位や人間関係などの職場内での優位性を背景に業務の適正な範囲を超えた精神的・肉体的苦痛を与える、または職場環境を悪化させる行為です。

では、次のケースはどうでしょうか。育児休暇を申請した部下を、「奥さんに任せとけ、この忙しいのに冗談言うな」と一蹴した。あるいは部下にかなり大きな仕事を振り、「男のくせにこれくらいの仕事を“できない”とは言わないよな」と発破をかけた。どちらも普通にあることと思いがちですが、これらはパワハラにあたります。上司への嫌がらせや、同僚や先輩後輩の間のいじめもパワハラですから、被害者、加害者どちらにもならないように気を付けて。“男は黙って我慢”なんてイマドキ流行りません。



男性問題に

気づこう！

瀬地山角 東京大学大学院教授



せちやま・かく
東京大学大学院博士課程修了、学術博士。ハーバード大学客員研究員を経て東京大学大学院総合文化研究科教授。著書に「お笑いジェンダー論」など。

男女共同参画は女性の問題だと思っている人も少なくないと思う。しかし、見方を変えると、男性の問題でもある。その一つが、男性の家事・育児時間の少なさである。国の調査(2011年)では、共働き世帯の1日の家事時間は、女性4時間53分に対し、男性は39分。就学前の子どもを持つ世帯の育児時間では、女性3時間15分に対し、男性は37分だ。この極端な差は是正すべき社会問題であると言わざるを得ない。

◆ 男性の家事が命を救う？

たかが家事で？ と思っかもしれないが、実は深刻な問題を含んでいる。2015年の自殺による犠牲者数は24,0

ドラマに見る 男性像の変遷

1974年 『寺内貫太郎一家』
1990年 『渡る世間は鬼ばかり』
1994年 『オトコの居場所』
2001年 『ムコ殿』
2004年 『アットホーム・ダッド』
2006年 『結婚できない男』
2015年 『偽装の夫婦』

男性像や結婚観の変化は、テレビドラマの世界でも如実に表れています。

『寺内貫太郎一家』や『渡る世間は鬼ばかり』に描かれるのは、家長としての父親とそれに従う妻。1990年以前は頑固で仕事一筋の夫をなだめずかす穏やかで心優しい妻のイメージが定着しています。男性の頑固さが引き金となって巻き起こる数々の家庭内トラブルは、女性が心を砕いて解決するべきだともいうように。

1990年以降からは、従来の男性像が崩れはじめます。94年に放映された『オトコの居場所』では女性のパワフルさに振り回される男性の姿がコミカルに描かれています。

大きな変化がみられるのは2000年以降です。2001年『ムコ殿』や2004年『アットホーム・ダッド』ではそれぞれ、婿養子・専業主夫として生きる男性をリアルに描き出しています。プライドと世間の目、家族の思いのはざまに揺れる一人の男を通して本当の幸せとは何か？ 家族とは何か？ を考えさせられます。

2006年『結婚できない男』、2015年『偽装の夫婦』には従来の制度にとらわれない結婚の形が登場します。経済的に自立した女性との結婚というテーマが見出されるのもこのころです。

時代を反映するといわれるドラマにはさまざまな男性像が描かれています。

変わる“らしさ”

男は強く、たくましく、弱音をはかない。家族を養うために残業もいとわず働くのが当たり前。これが社会の求める「男らしさ」でした。しかし、社会の構造が大きく変わり、旧来の男性像を維持するのが難しくなっています。そんな中、登場したのが育児や家事に積極的に関わり楽しむイクメン、カジダンなどの新しいスタイルです。

とはいえ、長時間労働したうえに家事も子育てもこなそうとすると、過労死にもつながりかねません。“らしさ”は社会の中でつぐられ、時代とともに変わるもの。最近では「女らしさ」「男らしさ」にとらわれない生き方を尊重する考え方が広がっています。

男女が共に仕事、家事、育児を楽しめる、そんな社会を実現するためには働き方の改革が求められます。

イクジイ

老後をどう考えるか。特に男性にとって、これは大きな課題です。仕事一筋で生きてきた男性の退職後の姿はさまざま。生きがいとは何かを模索し続ける人や、人生を楽しむ方法を知らないという人もいます。

イクジイは積極的に育児に関わる中高年男性をいいます。とかく男性は仕事から離れることで孤立感や無力感、社会から断絶されたような閉塞感といった感情を抱きがちです。孫を育てることで男性は再び社会の一役を担う。男性が生きがいを見出す機会にもつながります。イクジイは今、新しい生き方の一つとなっています。



25人（警察庁統計）で、その約7割が男性なのをご存知だろうか。

98年以降急増して、14年連続して3万人を超えた時期があり、生活・経済上の理由による40〜50代の男性自殺者が増えたことが原因だった。98年はアジア経済危機の翌年。低成長の時代に、大黒柱の役割は今の日本の男性には重すぎると言えよう。

であれば、家計の一方を女性に支えてもらうしかない。だが、男女の家事・育児分担にこれほど差があると、女性が正社員として働き続けることは難しい。女性が出産退職後、パートなどの非正規社員として働くケースが多いのはこのためである。

◆家事シェアで経済も楽になる？

女性が正社員として働くには男女で家事・育児をシェアすることだ。実はこのメリットは、経済的にも相当大きい。女性正社員の平均年収を約350万円と仮定して、出産後30年働き続ければ1億円以上稼ぐことになる。必ず当たるジャンボ宝くじを手に入れているようなものだ。

さらに、男性が1日2時間家事を分担するとしよう。女性の年収350万円が家計にもたらされ、この2時間の家事労働を時給に換算するとなんと5000円になり、月に30万円分もの残業をしていることになる。だが、実際に月に30万もの残業をしていたら翌年には過労死しているかもしれない。であれば残業など断って家で夕食を作り、妻の帰りを待つほうが家計としては合理的だし、何より大黒柱としてのプレッシャーから開放してくれる。

つまり、男性の家事・育児参加は、家計を助けるだけでなく、自らの命を救うことになるのだ。決して他人事ではない、多くの男性に気づいてほしい。

●男女共同参画講座

「祖父母塾・入門編」
何が変わった？ 変わ
らない？ イマドキの
子育て事情と社会」

講師・ぼうだあきこ氏

(NPO法人孫育て・ニッポン理事長、NPO法人ファミリーリングジャパン理事)



「命のはじまりはどのくらいの大きさか知っていますか？」

先生の問いかけに首をかしげるおじいちゃん。もちろん知っていますとばかりに目を輝かせるのは、つい数か月前に出生したばかりのママでした。

平成28年12月1日(木)に行われた「祖父母塾・入門編」は、20代から80代までの幅広い年齢層が集まり意見交換をする、活気あふれる場となりました。参

加者の多くは60代から80代の意欲的な祖父母たち。赤ちゃんを抱えた30代ママや、将来の結婚を見据えて参加した20代男性の姿もありました。

命のはじまりは誰も皆同じで0・1ミリの受精卵。生まれる確率は3億分の1です。今も昔も命の重さは同じだけれど、子育て環境は大きく変わっています。

良い関係作りは役割のスライドから

祖父母世代と子育て世代の摩擦は、「親から子へと上手に役割のスライドができていないから」。例えば、「経済的に自立していない家庭や、子どもの世話は全て祖父母任せの家庭もある。祖父母の皆さんには子育ての最後の仕事として、

いかにわが子を自立させるかに力を入れてほしい。それは精神的自立と経済的自立の2つ」と先生は力を込めました。更に、「私から皆さんに3つお願いがあります」とも。①孫にとって心許せるオアシスのような存在になる、②娘がいる祖父母は、夫の実家にも孫を遊びに行かせるように娘に言う、③息子がいる祖父母は、育休をとるとい息子を非難しない。

イマドキの子育て事情

「園児の声がうるさい」と保育園の建設計画が近隣住民の反対にあう、日本の社会。近隣の人に虐待通報されるのを恐れて、赤ちゃんが泣くと一目散に窓を閉めるイマドキのお母さん。こうした事態

に対処するために提案されたのは、「孫が生まれました」「いつもうるさくしてすみません」などの、近隣の方へのご挨拶です。「今の子育て世代はそうしたことが苦手な人が多いので、祖父母世代が促してあげてください」と的確なアドバイスを、受講者は真剣に聞き入っていました。また、少子化により子どもを見る機会が減り、身近に赤ちゃんを知らないまま親になった子育て世代が目立ちます。『いいないないばあ』ができないママや、赤ちゃんをあやせないパパも珍しくありません。

イマドキの子ども

最近、企業が新入社員研修で時間をかけているのは電話の受け答えだそうです。携帯電話には『知らない人と電話で話していません。』「知らない人と電話で話す機会がない」ので、『誰からかかってきたかわからない固定電話』には怖くて出られないのだそうです。また、「ペットボトルのふたを開けられない子どもや水道の蛇口をひねることができない子どもも出てきた」と聞き、参加者からは思わず「ええーっ」という声が漏れました。

水道のレバーは上げ下げするものが一般的だからということ。家庭の中で教えられて普通に出ていたことが、出来なくなっている」との先生の言葉に危機感を抱く参加者は私だけではなかったはず。

求められる「たまご」育て

変わる子育て環境の中で先生が推奨するのは、『たまご』育てです。他人の孫と書いて「他孫」育て。「祖父母世代が隣近所の子どもの関わりを少し持つことで、子育て世代にとっても、子どもたちにとっても暮らしやすい社会になる」と先生は言います。核家族化や少子化により、ともすれば母親に負担がかかりがちですが、多くの人が子育てに関わることで一人の負担は減らせるはず。

「赤ちゃんの力ってすごいですよ。自然と人を集めてしまうから」

夫婦だけでなく祖父母、さらには近隣までをも巻き込む子育てが、育てる側と育つ側の双方にとって良い結果をもたらすということです。今後、男女共同参画社会の実現に向けて、祖父母の力への期待が高まっていくことでしょう。





世界の仕事・家庭・生き方

国が変れば事情も変わる。
5年前、フィリピンから日本に
来られた佐野ジュリーさんに
お話を聞きました。



「日本に来られた経緯と訪問介護の仕事に就かれた理由をお聞かせください。」

「日本に住んでいる姉の育児の手伝いのために、両親と一緒に来日しました。」

当初は姉の育児の手伝いをしながら英語講師をしていましたが、もっと日本語を使い、フィリピンで看護師をしていた知識や経験を活かしたいと考えて、この仕事を選びました。

「国連の調査によると、フィリピンは男女差の少ない上位国に挙げられています。日本で男女差を感じる点があればお聞かせください。」

約80年前に女性参政権が成立してからフェミニズム運動が浸透して、政府や企業に女性が入っていくようになり、法律やルールが大きく変わりました。ですから、今の若い人は「男ができることは、女もできる」「男女平等は当たり前」という育ち方をしています。

日本では、政府や企業の記者会見などに女性が登場しないのが不思議です。CMなどを観ても、女性はか弱くて優しいなど、非常に限られたイメージに縛られているように感じます。フィリピンでは、女の子が将来は大統領になりたい！というCMや、女性向けの警察官や消防

士募集のCMなど、メディアが当然のように男女に差が無いことを啓蒙しています。日本は、いろいろなことが進んだ社会ですが、男女平等については遅れていると思いますね。

「フィリピンでは女性の閣僚も多いと聞きますが、去年夏の東京都知事選で「初の女性都知事」が誕生したことをどう思われましたか。」

大きな変化だと思いました。民意が動かないと社会も変わりません。私の父は日本人なので、私も日本国籍で選挙権があります。この大きな動きを応援しようと、初めて投票に行きました。

「日本では出産・育児のために仕事を辞める女性も多いですが、フィリピンではいかがですか。」

100日間の出産休暇があります。また、家族や親せきがサポートしますし、多少余裕のある家庭では家政婦もいるので、出産を理由に仕事を辞めるというのは一般的ではありません。むしろ、子供に良い教育を受けさせるために夫婦共働きで家計を支えるという考え方が強いんですね。女性が外で働いて男性が主夫をするという家庭もあります。

「最後に、将来の目標をお聞かせください。」

フィリピンの医療従事者は世界的にTLC (Tender Loving Care) と言われて質の高いケアを提供しています。そうした人材が日本で働く機会を得られるようにサポートしたり、日本の高い農業技術をフィリピンに伝えて、品質の良い農産物を自国で生産できるようにになったらと考えています。そのために、日本の生活や文化をもっと学んで、日本とフィリピンの架け橋として、知識や経験を役立てていきたいですね。

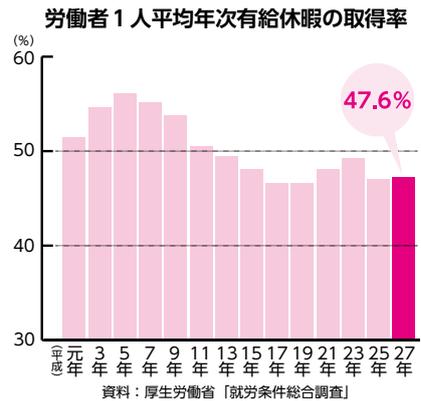
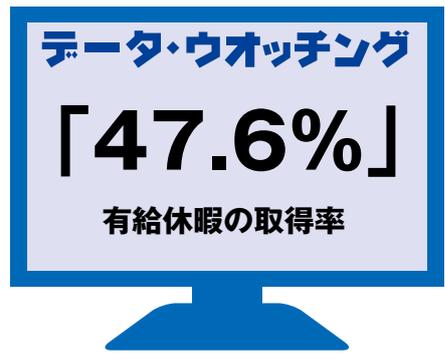
男女平等事情



「経済発展が著しい首都マニラ」
Photo: Hideo Muraoka

フィリピンでは1986年、アキノ元大統領が女性として初の大統領に就任して以降、女性の基本的な人権や社会参画が保障されるなど男女平等が憲法により規定され、大きく進んできました。
世界経済フォーラムによる、経済、教育、健康、政治における男女の格差から国の男女平等度（ジェンダー・ギャップ指数）をはかるランキングでは世界7位

（日本は111位）、アジアでトップとなっています。分野別では、経済16位、教育34位、健康1位、政治17位で、どの分野でも日本をはるかに上回っています。政治への女性活用が進んでおり、社会的弱者の政治参画を確保するパティリスト制や政党でのクォータ制導入により、2015年の女性議員の割合は27.1%（日本11.7%）となっています。



いきいき働くためには休暇も大切です。平成27年の有給休暇の取得率は47・6%で半数を下回っています。長年、日本人の働き過ぎが指摘されてきましたが、年々下がり続ける傾向にあり、解消されていません。

休日数は世界並なのに

日本の年次有給休暇は、初年度に10日、その後1年勤務することによって増え、最長で20日付与されます。実際の取得日数で見ると、平成27年の平均付与日数は18・4日で、取得日数は8・8日でした。これはパカンス先進国のフランス30日、ドイツ30日、イタリア25日などと比べて低い数字です。

一方、有給休暇と有給休暇以外の週休日や祝日を含めた年間総休日数で見ると、日本は134・7日で、フランス145日、ドイツ145日、

イタリア140日とそれほど大きな差はありません。日本の有給休暇の取得日数が少ない要因には、付与日数の差もありますが、取得率が上がれば欧州の水準に追いつきます。

どうして休めないの？

日本人の有給休暇取得率を引き下げている原因に、休暇を取得することへの罪悪感があると言われていきます。休暇を取ることによって上司の顔色が悪くなるからと、勤務評価への影響を気にしたり、抱えている仕事量が多く、休暇を取ることと同僚へ負担をかけてしまうかもしれないと懸念したり、上司や同僚に休暇を取ることとを相談できず休めない場合があります。また、休暇中の代替要員がないので休むことができないなどの労働環境も、有給休暇の取得率を引

き下げている一因となっています。

休暇の意義を考える

では、働き過ぎと言われる日本人が有給休暇の取得率を向上させるためには、どのようなことを改善していけばいいでしょうか。有給休暇の計画的付与や、そのための代替要員の確保など、労働環境の改善も重要ですが、まず働き過ぎることのデメリットを自覚することも必要です。

周囲に迷惑をかけまいと休暇を取らず働き、健康を害してしまったり初めて休暇を取るといった働き方よりも、上手に休暇を取り健康的に仕事をしたほうが、結局周囲にも迷惑をかけない、効率のよい時間の使い方をしているのではないのでしょうか。有給休暇の取得率の向上は、働き過ぎの日本人が健康的な暮らしについて考えることから始めなければならぬのかもしれない。

また、休暇とは単に身体を休めるという意味だけではなく、労働以外の人生の過ごし方を実現できる時間でもあります。休暇中に得た仕事以外の人生の宝物は、生きる活力となりさらに人生を豊かにするでしょう。休むことは、生産性を下げることでも、仕事を疎かにすることでもありません。休みなく働く機械にさえもメンテナンスが必要であることを忘れてください。

ストップ!

職場のハラスメント



ハラスメントとは、いじめや嫌がらせのことを言います。特に職場で問題になっているのはパワーハラスメント（パワハラ）、セクシュアルハラスメント（セクハラ）、マタニティハラスメント（マタハラ）等です。職場でハラスメントが起こると、被害者は心身の健康を損ね、勤務の継続が難しくなるばかりか、職場の雰囲気が悪くなったりと生産性が落ちたりするなど、働く環境を悪化させることにもなります。

この問題の難しいところは、行為者にそのつもりがなくても、受けた側が不快に感じたりダメージを受けたりすれば、それはハラスメントとみなされてしまうことが多い点です。どんな言動がハラスメントと受け取られてしまうのか、一人ひとりが知っておくこと。円滑なコミュニケーションを図り、気持ちの分かり合える関係になっておくことが大切です。それが「ハラスメントは起こさない・起こさせない」という職場の雰囲気づくりを支えるのです。

相談窓口

東京労働局雇用均等室

☎03(3512)1611

8:30~17:15

(土・日・祝日・年末年始を除く)

相談は無料。匿名でも受け付けており、秘密は守られます。

ワーク・ライフ・バランス推進企業認定制度のご案内

ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）は、柔軟性に富む持続可能な強い組織へ企業を成長させる「明日への投資」です。新宿区では、施策の一環としてワーク・ライフ・バランスの実現に取り組む区内の企業・事業所に対して、推進企業の認定を行っています。

新宿区ワーク・ライフ・バランス推進企業認定制度の特徴

① 2つの認定区分

- ・すでに取組みが進んでいる企業を対象とした「推進企業」認定
- ・これから取り組もうと思っている企業を対象とした「推進宣言企業」認定

② 4つの分野の認定

「推進企業」認定に際して「子育て支援」「介護支援」「地域活動支援」「働きやすい職場づくり」の4分野での認定を行っております。

③ ワーク・ライフ・バランスに関するコンサルタント派遣が最大5回まで無料

- 【活用例】就業規則の作成支援・見直しのアドバイス
ワーク・ライフ・バランスに関する社員向け研修の実施
ワーク・ライフ・バランスに関する社員意識調査、調査を元にしたアドバイス



新たに認定されたワーク・ライフ・バランス推進企業をご紹介します

株式会社日本レーザー (新宿区西早稲田2-14-1)

認定分野 子育て支援・働きやすい職場づくり

業種 レーザー機器輸入販売

認定のポイント

- ・1業務2人担当制により、育児と仕事の両立を行う社員の負担が軽減されており、定着率が高いためにスキルを持った社員が多く、労働時間を抑えることができている。
- ・有給休暇の取得率は5割を超えており、個々の事情に合わせた労働時間の調整が可能など、ワーキングマザーも働きやすい環境が整えられている。



問合せ 男女共同参画課 ☎03 (3341) 0801

本の紹介

『男の料理』

カンタンおいしいオヤジの味

島根県・川本町お父さんの料理教室、大野美穂／ワン・ライン



料理をするとき、どんな食卓にしようかと想像しませんか？味はもちろん、できれば栄養があるもの、でも何よりも楽しい食卓にしたい。島根県川本町のお父さんの料理教室

は、そんな素敵な食卓を目指して、昭和62年から現在まで活動しています。この本には、シェフではなく普通のお父さんたちが実際に作った料理のレシピ本。この1冊で料理ができる男になれます。お店を開いたり、炊き出しをしたり、お父さんたちが教室を飛び出して活躍する様子も伝わります。お父さんたちからもらう元気は、食は心の栄養でもあることを思い出させてくれます。

『新しいパパの教科書』

ファザーリング・ジャパン／学研教育出版



理想のパパ像を教える本ではありません。「笑っている父親」であるための方法を知る本です。子育てをするパパが本当に知りたいのは、実践者の生の声ではないでしょうか。

「父親としての自覚がまだない」「子育てってどうやって楽しむの？」そんな疑問を抱えるのはあなただけではありません。本書には、さまざまな立場で日々の子育てに奮闘するパパの声が凝縮されています。ポジティブな意見からネガティブな感情まで経験者はありのままの子育てを赤裸々に語ります。そこから導き出されるパパの子育て方法とはいったい？この本が答えを見つけるカギとなります。

『新・気づいて乗り越える 精神的DV(夫のモラルハラスメント)に悩む女性のためのガイドブック』

長谷川七重+グループしおん／メディアアイランド



いつのまにか夫の言いなりになっていませんか？精神的暴力は、けがなどの被害が目立ちやすい身体的暴力とは異なり、当事者に被害の自覚がないことがあります。本書では夫による「支配のコントロール、のしくみ」を学び、自分がそのコントロールを受けていることに気付くために、自分の思考のクセや行動パターンを認識するチェックリストを作ります。DVの被害にあっている当事者だけでなく、カウンセラーや家族等、さまざまな立場の支援者の人たちも理解を深めることができます。また、子どもたちへの深刻な影響や対応のしかたについても詳しく紹介されています。

は夫による「支配のコントロール、のしくみ」を学び、自分がそのコントロールを受けていることに気付くために、自分の思考のクセや行動パターンを認識するチェックリストを作ります。DVの被害にあっている当事者だけでなく、カウンセラーや家族等、さまざまな立場の支援者の人たちも理解を深めることができます。また、子どもたちへの深刻な影響や対応のしかたについても詳しく紹介されています。



『ウィズ新宿』を いっしょにつくりませんか

実は区民の編集委員が作っている『ウィズ新宿』。「読書が好き」「文章を書くのが好き」「編集に興味がある」「イラストが趣味」のあなた、初心者でも心配はいりません。男女共同参画について学びながら、プロの編集者の指導のもとで情報誌を作りましょう。皆さまのご応募をお待ちしています。

応募資格 土曜日の編集講座（3日間）と編集会議（月に1～2回）に出席できる方で、区内在住・在勤・在学の18歳以上の方。

*詳細は募集要項または区報3月15日号を参照

募集期間 平成29年3月15日（水）～4月7日（金）

募集要項は男女共同参画推進センターのほか、区立図書館・出張所・地域センター等で配布します。また、新宿区のホームページからダウンロードもできます。

問合せ 男女共同参画課 ☎03(3341)0801

しんじゅく女性団体会議

区内の女性団体の連携と女性のエンパワーメントをめざし、年6回の定例会を行っています。現在11団体で活動中です。平成28年度は「女性と子どもの人権」をテーマに下記の研修等を実施しました。

【研修】

「子どもと女性の視点からの防災について」

講師 危機管理課 地域防災担当副参事

【公開講座】

「子どもと女性の貧困 ～現状を学び、自分たちが出来ることを考える～」

講師 NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ 中島智美氏

【研修会】

「こども食堂をやってみた」

講師 NPO法人 レインボーリボン 代表 緒方美穂子氏

【日帰り研修会】

富岡製糸工場



新規団体を随時募集しています。ただし、平成29年4月からの活動に参加を希望される場合は3月17日（金）までにお申込みください。

下記の要件を満たしている団体が申込できます。

- ①区内に活動拠点をもち、2年以上継続的に活動している。
- ②女性の地位向上と一般的な教養を高める活動を継続して行っている。
- ③会員数が20名以上で、構成員の半数以上が女性かつ8割以上が新宿区民

問合せ 男女共同参画課 ☎03(3341)0801

◆ 編集委員を終えて ◆

1年で2冊の編集を経験して、SNSで誰でも情報が発信でき、また、インターネットで多くの情報を知ることができる時代だからこそ、紙の広報誌の意味があると感じました。そして、男女共同参画とは「老若男女」全体が、生活のいろいろな場面で、それぞれに輝ける社会を作ることだと、伝えていきたいと思います。（木村 桂子）

男性視点で男女共同参画社会を考えようとなると、どうしても、身近な同年代の男性を想像して考えてしまいがちでしたが、座談会で様々な年代の方の視点に触れることができ、大変に勉強になりました。当たり前のことですが、社会の在り方には、政治や経済状況が大きく影響し、それぞれの年代で違った価値観が生まれますが、それを見逃さず対話してしまうことが多かったな…と感じました。最近はこの年代の人はもしかしたらこういう考えかも…と想像するのが楽しみです。（坂下 恭代）

時代が変わってもなお古い価値観の中に生きる人がいる。どういう軸で生きるかはおのおのの自由で、善しあしの問題ではありません。ただ、生きづらいと感じる人がひとりでもいるなら、社会にほころびが生じている証拠だと思えます。

今回の特集を通して、日本人男性のいくらかはいわゆる“男らしさ”に縛られる窮屈さを感じていることを知りました。多様性とたやすく言うものの、一人ひとりの意識変革がまだまだ必要だと強く感じます。（坂本 萌）

編集後記

特集は、区内在住在勤の男性にお集まりいただき、仕事、結婚や子育てなど、現代を生きる男性をめぐる問題について座談会で語り合っていました。女性の活躍推進は喫緊の課題ですが、男性もさまざまな場面で悩んでいます。お互いが生きやすい社会とは、皆さまはどのように考えますか。どうぞご感想をお聞かせください。

表紙写真

信濃町子ども家庭支援センターで遊ぶ親子（右上・中）・市谷小学校おやじの会の活動（左下）



発行 新宿区子ども家庭部男女共同参画課
新宿区立男女共同参画推進センター
〒160-0007 東京都新宿区荒木町16番地
TEL03(3341)0801 FAX03(3341)0740

発行日 平成29年3月15日

